

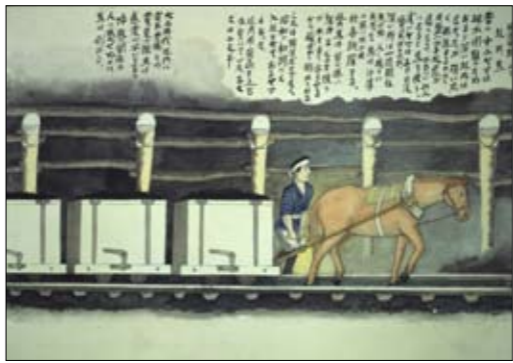
山本作兵衛

コレクション展

今回は、「運搬・縁起・迷信・禁忌」というテーマで11月15日から12月11日まで行われた第3部と、「ヤマの仕事／米騒動」というテーマで12月13日から1月9日まで行われた第4部から、6点の炭坑記録画とその画中文書の現代語訳を紹介いたします。なお、記録画のタイトルについては「炭坑の語り部 山本作兵衛の世界」田川市石炭・歴史博物館／田川市美術館編 2011年(第二版)によります。

●第3部展示作品より

坑内馬



画中文書の現代語訳
明治中期からの坑内馬。昔の小ヤマは排水困難のためあまり深

い坑内はなかったが、横(水平)方向に広く掘進するので、片盤(水平坑道)の距離が長くなる。2メートル以上になると、馬を使って運搬する。

(坑道が)浅いヤマは、毎日日没頃に(馬を地上に)あげるが、深い所は1週間位あげない。久しぶりに地上へあがった馬は、娑婆の風に吹かれ、喜び跳躍する。

坑内馬は背の低い力の強いものを使うが、水を多く飲ませるから腹ばかり膨れている。

これは明治だけでなく、昭和の初期にも馬を入坑させているヤマもあった。坑内用の炭函を5台位ひいていた。(馬が運ぶのは1回で)3トンまたは2トン半。

大正時代の坑内には電気が登場した。漏電の際、馬は感電が早かったという。蹄鉄の関係だろうか。

ヤマの坑口



人は感じないのに、馬は倒れる。

※1「片盤」：炭層の傾斜する方向と直角で、傾斜のない方向。

※2「蹄鉄」：馬の蹄に装着する鉄

採炭休業日



画中文書の現代語訳

明治時代の旧暦12月(師走)24日は、採炭休業日であった。それは(山の神信仰のために)入坑者がいらないからで、当日は山の神が山で裸になって着衣の洗濯をしておられると言っていた。その場に出逢うと、(裸での着衣の洗濯を)知っていった者は命をとられ、知らずについても両眼をとられると怖れていた。

またヤマ人は、山神は女神と決めており、女房(妻)を山の神と呼んでいた。それは、富士山の守護神(浅間神社)である木花開(咲)耶姫(命)神を信仰していたのであろう。(木花開耶姫命は)大山祇命の御子神であるから、深い意味はあったわけ。(当日は、農家の人も山にはいかなかった)

●第4部展示作品より

風橋―坑内通気



画中文書の現代語訳

明治からの風橋、坑内通気。排気坑道が十字路になるところには、必ず風橋がある。日鉄など大手ヤマには1/16(2ミリ)の鉄板で大型の楕円パイプを天井に嵌めていたが、中小ヤマは杉板張りであった。もともと、大手ヤマは単丁式でないから、風橋は少ない。

天井の堅いヤマでは、(風橋設置に)相当の工賃がある。(天井の)切り上げと木材の予算も大きい。

※9「風橋」：入気坑道と排気坑道が交差するところで、混流を防ぐために立体交差として橋を架けること

※10「単丁式」：単丁切羽。単独で設定された狭い切羽

ヤマの米騒動1

(羽釜合戦)



画中文書の現代語訳

ヤマの米騒動、羽釜合戦、杓子かぜ。大正5年、A系(麻生系炭坑)分配所で、白米1升(1.4キログラム余)金15銭。6年には20銭くらいになり、7年7月初めより毎日1銭、2銭と(米価)が上がり続け、(7月)末頃には、市価(市場価格)で56銭まで高騰。ヤマのベテラン坑夫でも1日働いて(賃金が)米2升(に)しかならないという破目に陥った。

米騒動は、大正7年8月3日、富山県西水橋の漁夫の主婦たちが口火をきり、全国に広がった。ヤマでは、田川郡蔵内峰地炭坑が第一の烽火をあげた。(2年前の(米1升)15銭が50銭台に跳ね上がったが、稼働賃金は据え置き。悲鳴

ヤマの米騒動と

其の後16



画中文書の現代語訳

大正7年は悪の記録を2つも残した。米騒動と風邪である。いわゆるスペインカゼ、インフルエンザ。我が国では悪性感冒、流行性感冒と唱え、全国に広まったが、ヤマの密集住宅には特に猖獗を極め、倒れる者が多かった。S坑(麻生山内坑)は3百余名の小ヤマで

画中文書の現代語訳

明治、大正、昭和のヤマの坑口(はしりこみ)での「差し戻し」。坑内のマキタテと同じ設備であるが、捲き揚げた実函をサシて空函を捲き揚げるから、(実函と空函の位置が)正反対になる。このやり方は、コース(の位置が変わらず)常時函から離れないので、逆走の憂いがなく、安全第一であった。

日鉄のような大手ヤマは、鉄骨棧橋を架けて捲揚機を高く据えて、選炭機に(石炭を)直接流し込むようにしていたが、中小のヤマではそんな大規模なことはできない。一度低地に(実函を)流し込むところが多かった。もともと、高地の場合である。

6 函捲きの電気捲機は60馬力位。蒸気(捲機)はピストン12インチ以上。ボタ(を積んだ)函は石炭の1.5倍の重さ。

※3「はしりこみ」：走り込み。坑口の傾斜になるところ

※4「差し戻し」：捲き揚げた炭車をいったん高く引き上げて、本線へ流し込むこと

※5「マキタテ」：捲立。捲卸から片盤曲片への入口で、空函を実函に連結しかえて捲き揚げる場所

※6「実函」：石炭を積んだ炭車

※7「サシ」：差す。傾斜軌道で炭車を下方へおろすこと

※8「コース」：炭車を連結する金具

あつたが、毎日平均1人(風邪にかかると)続いた。これは、全世界に流行し、地球を揺さぶった。大正7、8年の記録には、全世界の患者6億人、死者2千万万人、日本では患者2千3百万、死者39万人。

大正中期頃まで葬儀に花輪もあつたが、弔旗が多かった。天蓋は棺の上の被りもので、逆に棺にのせる。竜頭や角灯を2個ずつ、先頭に紙幟も2流(あつた)。

ヤマの葬式で弔旗はヤマの顔役ほど数多く、軽輩(格下の者)には一本も立たない。

葬儀の翌日は、親族2人以上で会葬者を訪問御礼にまわる。葬式も夜、回礼も夜提灯をもっていく。昭和中期(12年頃)より廃止。大正8年初夏(5月)の頃、S

坑で酒と心中した男がおつた。ヤマの好景気で金が儲かるからであつたが、力士のような体格で仕事も2人前する噂で、酒豪でもあつた。それが、(四斗樽)72リットルを7日間呑み干し、8日目に昇天した。A某(匿名)はたらくふく飲んで満酔、本望であつたでしょう。当時1升1.8リットルが1円、上酒になると1升1円20銭。日鉄購買会では(大正末)1.8リットル75銭もあつた。

※12「猖獗」：(好ましくないものが)はびこって勢いが盛んであること

※13「天蓋」：棺にかける装飾用の覆い

現代語訳中の単語は可能な限り原文のまま表記しています。

山本作兵衛

コレクション展開催中

昨年9月17日から1月9日まで石炭・歴史博物館で開催された「山本作兵衛コレクション展」には、市内外から多くの観覧者が訪れました。期間終了前から、継続して原画を鑑賞したいという多くの声が寄せられたため、会期を延長し、1月11日から第5部、第6部として引き続き原画の特別公開を行っています。

- 会期 ～3月11日(日)まで
- 会場 田川市石炭・歴史博物館 第2展示室
- 内容 世界記憶遺産に登録された「山本作兵衛コレクション」(博物館所蔵)を展示し、次のテーマに沿って、それぞれ30点の原画(水彩画20点、墨画10点)を特別公開します。
- 第5部「ヤマの訪問者／世相」～2月12日(日)まで
- 第6部「ヤマの道具・機械／ヤマの子供」2月14日(火)～3月11日(日)まで